カンパニーデラシネラ×リー・レンシン（マレーシア）、リウ・ジュイチュー（台湾）、チョン・ヨンド（韓国）

『Hourglass』第1回報告書〈準備編〉

鈴木理映子

身体と言葉を行き来し、生まれるもの

ザ・グローバル・シアター・プロジェクト“場”（申請時の事業名）は、小野寺修二率いるカンパニーデラシネラが、アジアを拠点に活動する多様なアーティストと集い、対話し、創作、発表を行うプラットフォームとして立ち上げられたプロジェクトである。2016年のハノイ（ベトナム）でのワークショップおよび『もう一つの話』『ある夜の出来事』の上演以後、定期的に国際共同制作を行ってきたデラシネラは、2021年12月、本プロジェクトの第一弾として、フランスを拠点にヨーロッパで活動する梶原暁子、リー・レンシン（マレーシア）、リウ・ジュイチュー（台湾）を迎え、ジョージ・オーウェルの『動物農場』を下敷きにした『TOGE』をKAAT神奈川芸術劇場で初演。今年度は、その成果を踏まえさらに発展させる取組として、2022年12月下旬に、新作『Hourglass』のための10日間の集中ワークショップとショーイング（ワークインプログレス）を予定している。

「『TOGE』での経験が大きな意味での発射台になるんじゃないかって実感があるんです」と小野寺は第一弾の手応えを語る。「国際共同制作というと、どうしても文化交流的なつながりが注目されますが、僕としてはそれ以上にこの企画は、自分がやってきたことのベースをさらに外へと広げていくチャンスだと感じています。無言劇とかフィジカルシアターとか、いろんな言い方がありますけど、僕らがやってきたことの独自性を確固たるものにしたい。その欲望に忠実に向かうためにも、2021年、2022年と一緒にやるメンバーと出会えていることはプラスなんです」。

ダンスでもマイムでもない。手がかりとなるテキスト（原作）はあっても、その筋書きをなぞることもない。個々の身体を持ち寄り、関係性を構築しながら一つひとつの場面を立ち上げ、物語を生み出すデラシネラのスタイルは、海外からの参加者にとっても、さまざまな発見を伴うものだったようだ。マレーシアを拠点に、自らの作品の創作発表にも取り組むリー・レンシンは「作品の部分によって異なる体験を提供しているという感覚です。あるところでは体の質感を体験してもらい、また別のところでは社会的なつながりを見せている。一つひとつのシーンが粒立っていながらシームレスにつながっているという感覚も面白かった」と『TOGE』を振り返る。2018年にあった台湾でのオーディションで出会い、今回で4度目の参加となるリウ・ジュイチューは、小学校から高校まで舞踊の学校に通い、大学では演劇を専攻した経験を持つ。「私たちはダンスなら身体のトレーニングを中心にして、演劇ならアカデミックな理論を学んでといった勉強をしてきたので、言葉と身体をミックスさせて表現するという経験はあまりなかったかもしれません。デラシネラの作品はノンバーバルですが、台本はあり、その一つひとつのシーンに色彩があります。その色合いを理解して、自分の身体をどう使うのか考える。台本があるから自分がやるべきこと、出発点がわかるし、自由にそれを表現できることに心地よさを感じます。本番では出演者としてさまざまな任務を遂行している側面もあるわけですが、配信された『TOGE』を観て、テキストに書かれているものとはまた別の想像力を刺激されたことにも驚きました」（リウ）。

これまでにも「原作」のある作品や文学作品をモチーフにしたことはあったが、事前にテキストによる「台本」をつくったのは、実のところ『TOGE』が初めてだったという。新型コロナ感染拡大対策としての隔離の影響で、事前に予定した稽古期間が短かくなることから、少しでも早くイメージを共有するために始めた試みだったが、これがアイデアを膨らませ、クリエイションの時間をより充実させるきっかけともなったのだった。

現在準備中の『Hourglass』は、ブルーノ・シュルツの短編小説『砂時計サナトリウム』をもとに構成したもの。父を訪ねて郊外のサナトリウムを訪れた「私」が、過去と現在、現実と幻想が入り混じる時空間に巻き込まれ、彷徨う物語は、論理的に理解し、説明されることを拒むと同時に、繰り返し描かれる睡魔、睡眠の描写など、身体感覚を刺激する要素も多く含んだ題材でもある。「詩的な言葉に取り組んでみたいという気持ちもありましたし、夢や記憶といったモチーフは、デラシネラでやってきたことともも近いと感じています。今回はワークインプログレスということもあって、作品としてまとめるというよりは、いくつかのピースをつくる作業が中心になる気がしています」（小野寺）。

東京での滞在稽古直前の12月初旬、キャスト一人ひとりとのオンラインでの打ち合わせがスタートした。原作をどのようにパフォーマンスに昇華するか。小野寺とカンパニーメンバーの藤田桃子が、会場の条件、美術や照明、スペースの使い方も含めたビジョンを説明し（これも「言語」を介したイメージの交換の始まりと言える）、動き方や振りのアイデアに関わる「宿題」を渡す。そこでは「一つの役を複数人で」「能」「男女のデュオ」といった気になるワードも聞こえてきた。シュルツが書き遺した言語のイメージとデラシネラが構築してきた身体芸術の言語、そして韓国から新たに参加するチョン・ヨンドをはじめ、異なるバックグラウンドを持つ参加者の持つ身体言語がぶつかり合い、混じり合う実験が始まろうとしていた。

*オンライン・インタビュー（リー・レンシン）9月6日
　通訳：岩崎MARK雄大
*オンライン・インタビュー（リウ・ジュイチュー）9月6日
　通訳：山崎理恵子
*オンライン・インタビュー（小野寺修二、藤田桃子）11月14日

オンラインミーティングより